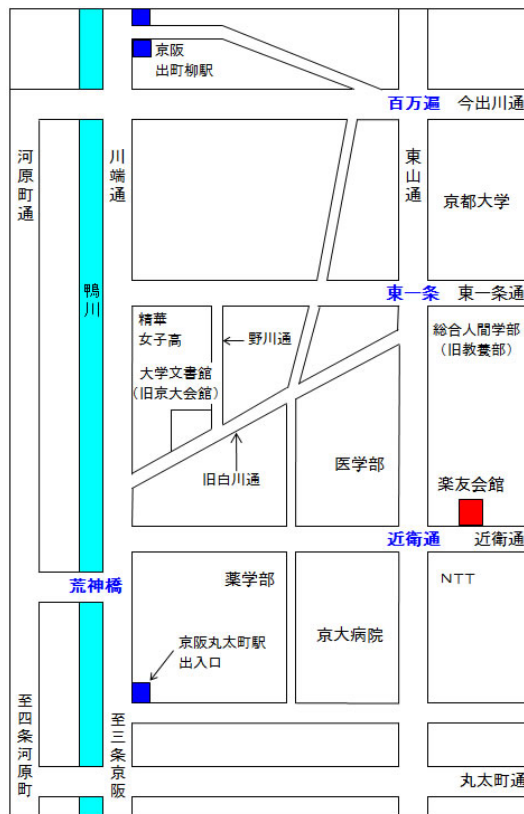


インド思想史学会 第24回学術大会 プログラムと発表要旨

開催日：2017年12月16日（土）

会 場：京都大学 楽友会館

京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7603



〒 606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp にお送りくださるだけで結構です）。

インド思想史学会 第24回(2017年度)学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第24回学術大会を下記の通り開催いたします。
皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日 2016年12月16日(土)

会場 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室

(理事会 12:00 - 13:00 京都大学 楽友会館 2階 会議室5)

参加受付 13:00 から 京都大学 楽友会館 2階 会議・講演室前
参加費：1000円 懇親会費：3000円

研究発表者および発表題目

13:30 - 14:20 高橋 健二(京都大学文学研究科・博士課程・日本学術振興会特別研究員DC)
「Śatapathabrāhmaṇa 10.5.3 の創造説における mānas- について」

14:20 - 15:10 加納 和雄(駒沢大学・講師)・張本 研吾(マヒドン大学・准教授)
「全知者存在証明議論の一断面? —ゲッティンゲン大学所蔵ラーフラ・サー
ンクリトヤーヤナ撮影梵文写本 Xc14/1d 中の未同定3葉について」

—— 休憩 ——

15:30 - 16:20 小川 英世(広島大学文学研究科・教授)
「バルトリハリ言語哲学における意味論への視座」

16:20 - 17:10 赤松 明彦(京都大学文学研究科・教授)
「バルトリハリのある詩節をめぐって」

総会 17:15 - 17:45 引き続き、2階 会議・講演室で

懇親会 18:00 - 20:00 楽友会館 1階 食堂にて

Śatapathabrāhmaṇa 10.5.3 の創造説における mānas- について

高橋健二 (京都大学文学研究科 博士課程)

どのようにしてこの世界は創造されたのだろうか。創造される前の世界はどのように存在していたのだろうか、あるいは存在していなかったのだろうか。世界の創造は現在の自分自身のあり方とどのように関わっているのだろうか。世界の創造を知ることによってどのような意味があるのだろうか。古代インドにおいてはその最古の文献である *Ṛgveda* 以来、世界の始まりについての様々な考察がなされてきた。

本発表では、Śatapathabrāhmaṇa 10.5.3 における創造説を、特に mānas- の役割に注目して分析する。この創造説は、*Ṛgveda* 10.129.1a 「そのとき非存在も存在していなかった、存在も存在していなかった」(nāsad āsīn nó sād āsīt tadānīm) という詩句の解説から始まるが、その内容は *Ṛgveda* 10.129 とは大きく異なる。*Ṛgveda* では太初の存在が何であるのか明らかにされてはいないが、Śatapathabrāhmaṇa 10.5.3 では、「非存在でもなく存在でもない」ものは mānas- であると解釈し、mānas- を太初の根源とする創造説を展開する。mānas- が言葉を創造し、言葉が生体機能を、生体機能が視覚機能を、視覚機能が聴覚機能を、聴覚機能が祭式行為を、祭式行為が祭火をそれぞれ順に創造したとされる。本発表ではテキストの解釈の問題に触れつつ、創造過程の記述を手がかりに、「非存在でもなく存在でもない」 mānas- とは、実現化・具体化されていない創造意欲を表していることを指摘する。

また「非存在でもなく存在でもない」ものとして根本原因という概念は、祭式学とは切り離された後代の創造説においても継承されている。本発表では *Mahābhārata* や *Harivaṃśa* に見られる諸創造・帰滅説と Śatapathabrāhmaṇa 10.5.3 の創造説を比較検討し、インド思想における創造説の発展史におけるその創造説の重要性を指摘する。

全知者存在証明議論の一断面？
ゲッティンゲン大学所蔵ラーフラ・サーンクリトヤーヤナ撮影梵文写本
Xc14/1d 中の未同定 3 葉について

加納和雄・張本研吾

現在ゲッティンゲン大学の図書館には Xc14/1d という整理番号によってポジプリントとして保管されている 1930 年代にラーフラ・サーンクリトヤーヤナがチベット、ゴル寺で撮影した一連の写本の写真がある。その第 5 フレームには未同定の 3 葉（片面）が収められている。今回の発表はこの 3 葉に関するものである。

現在のところ、発表者は、この 3 葉は 11 世紀までに東インドまたはネパールで作成されたものとする。その書体とフォーマットは非常に特徴的であり、同様の特徴を備える写本はあまり知られていない。作成時期を知る手がかりとなる他の写本との比較をまず報告する。

さらに、3 葉中最初の 2 葉は同一作品のおそらくは連続する 2 葉であろうこと（片面分の写真しかないため連続性は 100% 定かではない）を論じる。そこに記されているのは、クマーリラによる全知者批判を前提に、ダルマキールティによる *Pramāṇavārttika*, *Pramāṇa* 章の一群の偈が、それに対する返答、そして全知者の存在（あるいはブッダの全知者性）証明とみなす哲学的テキストと考えられる。さらに、第 3 葉は内容的には刹那滅論に関する議論であり、発表者はこの第 3 葉も他の 2 葉と同一の著者によるものとする。

最後に、この 3 葉の著者を同定する試みを行う。現在までに、この 3 葉に記されているのと同じテキストを発表者は発見していない。深い関係が見出されるのはシャーンタラクシタによる『タットヴァサングラハ』とそれに対するカマラシーラの註釈『パンジカー』、さらにラトナキールティによる *Sarvajñāsiddhi* である。我々は、これら 3 葉が *Jitāri*, *Śāṅkaranandana*, あるいは *Jñānaśrīmitra* の作品である可能性、さらには『タットヴァサングラハ』に対する未知の注釈である可能性などを検討する。ここでは、同 3 葉の著者が立脚する思想的立場、そして全知者存在あるいはブッダの全知者性論争における意義と位置付けを考慮する。

参考文献

加納和雄「ゲッティンゲン大学所蔵ラーフラ・サーンクリトヤーヤナ撮影梵文写本 Xc 14/1, Xc 14/57 について」『密教文化』第 212 号 2004 年

Kazuo Kano, “Two Folios from Sthiramati’s *Triṃśikābhāṣya* in Sanskrit Photographed by Rāhula Sāṅkrtyāyana: Diplomatic and Critical Editions of Göttingen Xc14/1e*,” *WZKS* 49, 2005, pp. 113–149

Kengo Harimoto and Kazuo Kano, “Fragments of a Commentary on the *Tattvasaṅgraha* (pt. 1),” *Newsletter of the NGMCP*, No. 6, September 2008, pp. 15–24

Kengo Harimoto and Kazuo Kano, “Fragments of a Commentary on the *Tattvasaṅgraha* (pt. 2),” *Journal of the Nepal Research Centre*, vol.14, December 2012, pp. 5–17

2017年度インド思想史学会（2017年12月16日）発表要旨
バルトリハリ言語哲学における意味論への視座

小川英世（広島大学）

パタンジャリは Mahābhāṣya において「我々は言葉を権威とする者である。言葉が語るところのもの、それが我々の権威である」(MBh [I.11.1; I.366.12]: śabdapramāṇakā vāyam / yac chabda āha tad asmākaṃ pramāṇam) と述べ、パーニニおよびパーニニ文法家を「言葉を権威とする者」(śabdapramāṇaka) と自己規定する。世界に対するこの文法家たちの基本的態度—〈在るものとしての世界〉(vastvārtha, things as they are) に対立する〈語られるものとしての世界〉(śabdārtha, things as they are spoken of) の主題化—のもとに展開された思想がバルトリハリの言語哲学である。

主著 Vākyapadīya 冒頭詩節において形而上学的観点からブラフマン (Brahman) は śabda (言葉の世界) の tattva (本源) であることを宣明したバルトリハリは、続く第 13 詩節において artha の tattva を取り上げる。同詩節は以下のとおりである。

VP 1.13: arthapravṛttitattvānām śabdā eva nibandhanam /
tattvāvabodhaḥ śabdānām nāsti vyākaraṇād ṛte //

(「artha-pravṛtti-tattva はまさに言葉を根拠とする。言葉の言葉を言葉たらしめる本質的属性〔である正しさ〕は、文法学に依拠せずには理解されない」)

バルトリハリは、本詩節における arthapravṛttitattva 「artha (意味、モノ・コト)–pravṛtti (活動)–tattva (本質、本質的属性、〈その属性〉)」という表現によって、言語活動 (vyavahāra) 上の六様の artha-tattva を意図している。彼は自注 Vṛtti においてその六様の artha-tattva を提示する。本発表は、自注が提示する多様な解釈を考察し、バルトリハリが言語活動における artha のあり方をどのような視点からどのように理解しているのかを検討する。

自注における arthapravṛttitattva 解釈は以下のとおりである。

1. 言葉の意味 (artha) の言語活動 (pravṛtti) 上の本質 (tattva) — 話者の意図 (vivakṣā)
2. 対象 (artha) の表現 (pravṛtti) の根拠としての対象のもつ属性 (tattva) — 言葉の適用根拠 (nimitta)
3. 言語活動上の究極の言語単位である文 (vākya) の意味 (artha) の本質 (tattva) — saṃsarga (融合)
4. 文の意味から抽象された語の意味としての実体 (artha) の言語活動上の本質 (tattva) — saṃsarga (連関)
5. 実体 (artha) の本質的属性 (tattva) と行為 (pravṛtti) の本質的属性 (tattva) — 既成体性 (siddhatva) およびその関連属性と向実現性 (sādhyatva) およびその関連属性
6. 言語活動の対象 (pravṛtti) である意味 (artha) の本質 (tattva) — 言葉から起こる聞き手の知 (buddhi)

ここにバルトリハリの言語理論を特徴付ける以下の理論の忠実な反映を見ることができる。

1. 言葉と意味の関係の理論 言葉と意味の間には因果関係 (kāryakāraṇabhāva)・能力 (yogyatā)・同一性 (so 'yam ity abhisambandhaḥ) という三種の関係が成立する。
2. 文理論 言語活動の究極的実在単位は無区分の文である。
3. 抽象理論 文法学は抽象 (apoddhāra) によって単一無区分の文を分節することによって成立する。名詞形 (subanta) と定動詞形 (tiñanta) という pada 項目も文からの抽象によって措定されたものである。そして抽象理論においては文意は抽象された語意間の限定関係 (viśeṣaṇaviśeṣyabhāva) である。
4. 概念論 概念知には対象の形象 (arthākāra) と言葉の形象 (śabdākāra) が顕現する。対象形象は物象化 (adhyavasāya) によって外界に付託される。すなわち、言葉には常に外なるものについて語り・語られるかのような錯認が起こる。

六様の artha-tattva 解釈はバルトリハリ言語哲学の意味論の全容を網羅したものであり、第 13 詩節とその自注は Vākyapadīya 第 2 巻 (文と文意) と第 3 巻 (抽象された言語単位とその意味および抽象された言語単位の統合形とその意味) に詳論される彼の意味論のシノプシスの役割を果たしているのである。

バルトリハリのある詩節をめぐって

赤松 明彦 (京都大学)

『ヴァーキヤ・パディーヤ』第1巻第1偈に対する注釈の最後には、バルトリハリのものでされる12個の詩節が並んでいる。「次のように言われている」という語によって導入されており、Frauwallnerは、これを現存しないバルトリハリの著作からの引用ではないかとしている。内容的には、そこまでの注釈で述べてきた内容を韻文でまとめたものと言える。これらの詩節のうちの10個は、11世紀の仏教徒ジュニャーナシュリーバドラ (Jñānaśrībhadrā)が著した『入楞伽經注』(Ārya-Laṅkāvatārasūtravṛtti)にバルトリハリのものでして引用されていることがすでに明らかにされており、中村元、Chr. Lindtner、畝部俊也らの研究がある。また、これらの詩節のうち二詩節は、ディグナーガの『三時の考察』(Triṅgāparīkṣā)の最後の二詩節と一致するものであることも、Frauwallnerによって早くに指摘されており、服部正明の研究もすでにある。その二詩節とは以下のものである。

1) VPVṛtti, p. 13. 5–p. 14. 2:

yathā viśuddham ākāśam timiropapluto janaḥ /
saṃkīrṇam iva mātrābhiś citrābhir abhimanvate // (ñ)
tathedaṃ amṛtaṃ brahma nirvikāraṃ avidyayā /
kaluṣatvam ivāpannaṃ bhedarūpaṃ vivartate // (t)

「ちょうど眼病におかされた人が、雲ひとつない清らかな青空を見て、それが様々な色をした部分と混ざり合っているかのごとくに思い込んでしまうのと同様に、この不死のブラフマンは、[それ自体は]なにひとつ変容をこうむっていることはないが、無明を原因として、あたかも汚れをそなえたもののごとくに、多様な姿をとって[この世界に]現れてくる。」

今回の発表では、この詩節が引用されるいくつかのテキストについて、その文脈におけるその詩節がもつ意味について検討を加えたい。検討の対象とするテキストは、先にあげた『入楞伽經注』、『三時の考察』の他に、マッラヴァーディン作の『観点車輪』、ハリバドラの作の『諸学説綱要集』、アバヤデーヴァ作の『真理知の完成』、そしてナーラーヤナ・カンタ作の『ムリゲンドラ・タントラ注』である。それぞれのテキストにおいて、この詩節が果たしている意味を明らかにすることによって、インド哲学史の一端を見ることができるとは思っている。